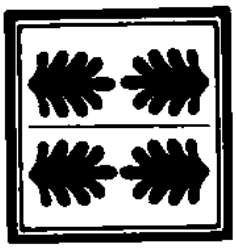
とらんぷ譚

幻想博物館

中井英夫



講談社文庫

幻想博物館
中井英夫
昭和56年3月15日第1刷発行

発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社国宝社

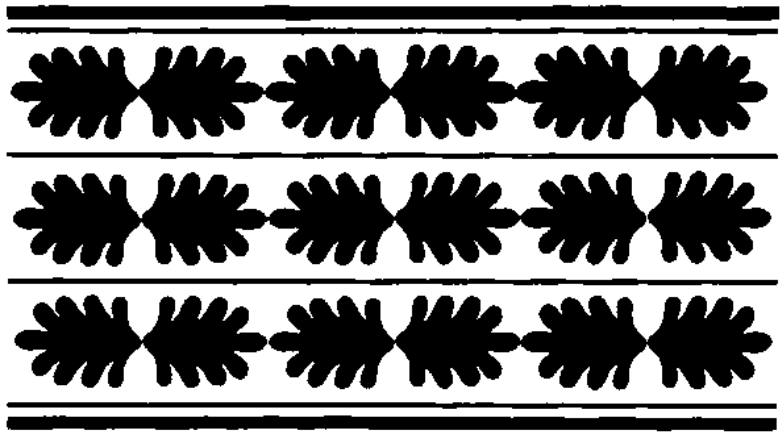
© Hideo Nakai 1981

Printed in Japan
0193-361956-2253 (0)　定価280円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

幻想博物館

中井英夫



講談社

目次

juillet 火星植物園 九

août 聖父子 二五

septembre 大望ある乗客 三九

octobre 影の舞踏会 五三

novembre 黒闇天女 六七

décembre 地下街 八一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

intermède チッペンデールの寝台もしくはロココふうな友情について　九五
janvier セザーレの悪夢　一〇七
février 蘇るオルフェウス　一一九
mars 公園にて　一三三
avril 牧神の春　一四九
mai 薔薇の夜を旅するとき　一六五
juin 邪眼　一七九
解説　澁澤龍彦　一九〇

幻想博物館（とらんぷ譚）

火星植物園

灰いろの曇天は、魚の尾のように垂れた。遠く海鳴りの響きが微かに伝わってくる。潮風に湿って草もまばらな赤土の丘の上に、その病院は建っていた。麓から仰ぐと、銃眼のついた尖塔や跳ね橋や、深い濠のある異国の城砦めいて見えたせいであろう、村の人びとは、そこを癲狂院とか脳病院とかの古めかしい名で呼んで、コンクリートの粗壁と鉄格子に囲まれたあの中には、血の染みた拷問室や、鎖で繋ぐ懲罰室があるのだと言い触らした。事実は日本でも稀*れなほど設備の行届いた精神病院だったのである。

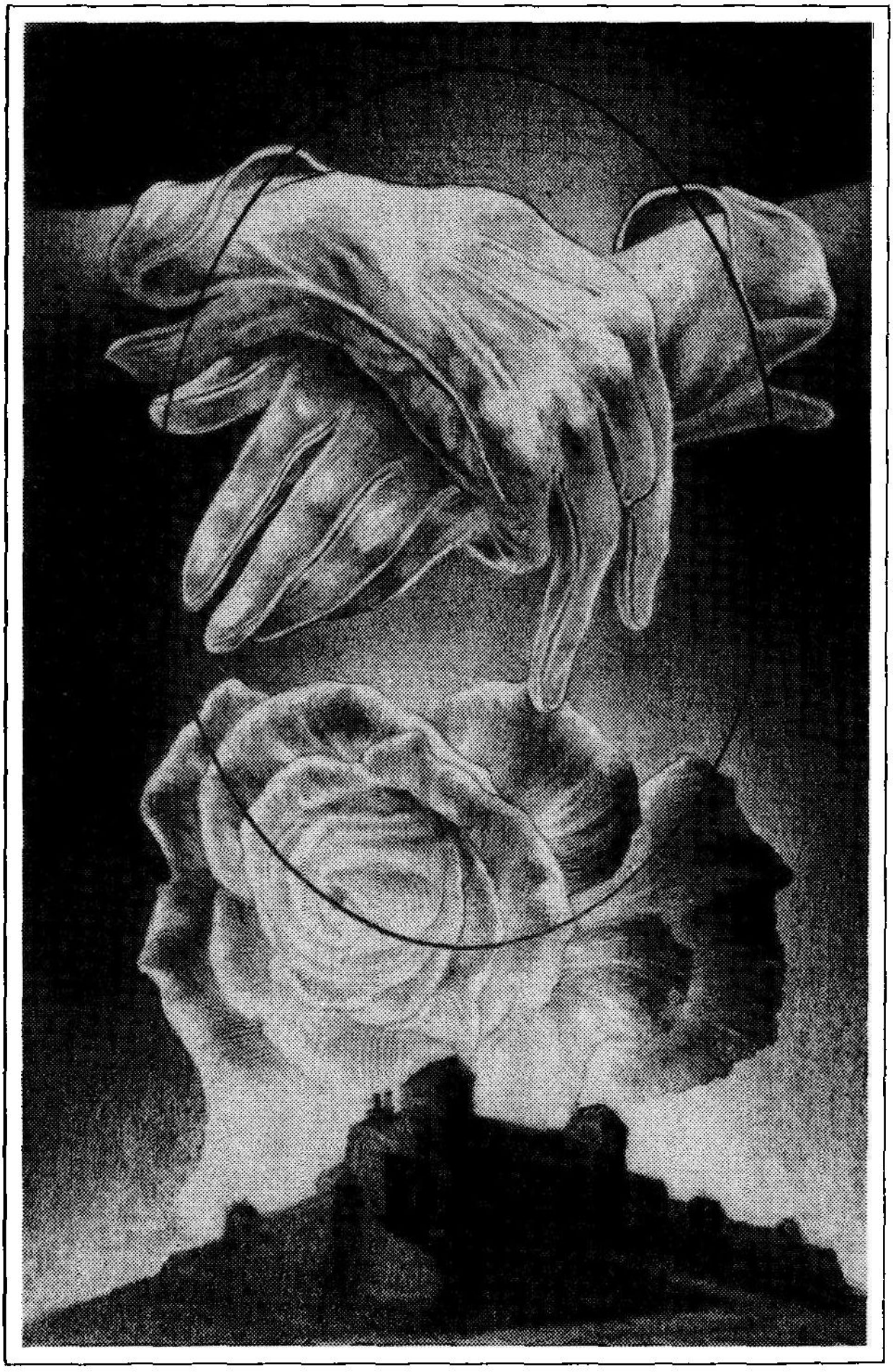
ここはまた、トラック何十台分もの黒土を運びこんで造成した、広大な薔薇園でも知られていた。新種の花々が絡(から)みあい縺(もつ)れあいして咲く異様な美しさは、早速また村人たちの憶測の種となったが、『流薔園(るそうえん)』という変った名の由来を訊ねると、院長は、

「この薔薇たちは、いわばここへ流刑になったようなものですから」

と答えた。

それはしかし、院長自身の思いでもあったのだろう。さる大学の精神科主任教授という地位を離れ、資産のすべてを傾けて風変りなこの病院を建てたのは、大学にいては到底得られない、彼自身の期待を充たすためらしかった。というのは、ここでは患者の身分や貧富の差などはいっさ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



い問題にしない代り、彼らの妄想や幻覚が類型的でない場合に限って入棟を許可していたからである。従って患者の妄覚が、自分の悪口をラジオが放送しているから止めてくれといった、ごくありふれたケースに落ちつき出すと、じきに麓に近い、別棟の一般病棟に移されてしまう。悪口をいわれたくないなどというのは、社会復帰をいそぎたいだけの心理だから、相応の医療を尽してやればいい。人間界へ戻りたいなどという患者は、この院長にとってさしあたり興味もない存在で、彼のいちばんの関心は、残された幻視者の群れの、さまざまな反地上的な夢を蒐集し、蓄えて、この『流薔園』を病院というより、幻想博物館として完備したいということにあるらしかった。

七月のある日、久しぶりに院長を訪ねて雑談を交したあと、私は窓辺に立って薔薇園を眺めた。花季には、壮麗な色彩と香気の饗宴が拡げられるが、夏に咲かせるのを厭うのか、いまは猛々しいほどに繁った葉が強い日射しを返すばかりで、花はどこにも見当らない。

丈高い薔薇の沈黙。いまこのとき、薔薇の内部では、何が行なわれているのだろう。

「花もいいが、ああやって黙りこんだ姿も悪くはないでしょう」

いつのまにか立ってきていた院長が、うしろでそう呟くのを聞きながら、私は妙なものを見つけた。薔薇園の外れに、円いビニールテントらしいものがいくつか光っている。白い排気鐘めいて伏せられたそれは、小型の宇宙船か空飛ぶ円盤といった奇異な趣きだった。

「あれですか」

私の問いに、院長は苦笑したようにいった。

「実はうちのお客さんに、またひとり変ったのが殖えましてね。まだ若い男ですが、それが妙な実験に凝っているんです。あれはいわば、〝火星植物園〟といったところでしょう」

「へえ、火星の植物を育てているんですか」

私は呆れた声を出した。

「いや、くるなりここの薔薇に魅せられましてね。夢中になったのはいいが、花のほうにはさっぱり関心がないらしい。根っこだけが好きなんですね。薔薇の根を見ると、こう、ほとんど性的な興奮に襲われるらしいんですが、それがこのごろ本物の恋愛を始めたようなので、厄介なことになりました」

「恋愛って、ここの患者とですか」

ゆっくり話をききたくなって、私は坐り直すと煙草を取り出した。院長もまた、自分の大きなデスクの向うに廻りこんで腰をおろした。しばらく二人の吐き出す烟りが流れた。

「患者だか、事務の女の子だか、それとも外界にいるひとか、さっぱり判らないんで閉口しているんです。本人に訊いても、もうじき判り出すことだって笑うばかりで……。あとでたぶんこの部屋にもくると思いますがね、その薔薇の根から始まって〝火星植物園〟を作るようになったいきさつは、ここに本人の書いた手記があります。手記というより、小説まがいの告白のようなものですが」

院長は何のつもりか、この暑いのにわざわざ両の手に手袋をはめると、机の抽出しから一冊の大学ノートを取り出した。表紙に大きく、ラテン語の標題が書かれている。

TANTUS AMOR RADICORUM

あいにく、そんなものは読めない。

「どういう意味ですか、これは」

「タンツス・アモール・ラディコルム。なべての愛を根に、とでもいうんでしょう。リンネの紋章のもじりですよ」

そういって、卓上の部厚い書物を指した。国際植物学会の年次報告書か何からしいその表紙には、図案化されたリンネ草の葉と花が左右からのびて、

TANTUS AMOR FLORUM

という文字を押し包んでいる簡素な紋章が、淡い緑で捺(お)されていた。

「スウェーデンのウプサラ近郊のハマービーというところですが、リンネウスの別荘がまだ残されていましてね。そこでは蔵書から紅茶茶碗のはてまでこの紋章で飾られているんですよ。もっとも、こっちのこれを書いたのは、そんな大学者とは比較にならない、暗黒時代の本草学者(ハーバリスト)でも考えそうな幻想ですが……。読んでごらんになりますか。なんだか筋が通っているようで、やっぱりどこかしらおかしいんですね。さあ、どうぞ、どうぞ」

手袋のままの手で押してよこされた大学ノートを、私は不審に思いながらも受け取り、そっと第一ページめを開いてみた。緑いろのインクで書かれた美しいペン字が、びっしりノートを埋

め、それは私が先ほど薔薇を眺めながら考えた、同じ思いから始まっていた。

『……伸び立った一本の薔薇の中で、具体的に何が行なわれているか、男はそれを知りたいと希った。それも、地上の Flos（花）ではなく、地下の Radix（根）の部分に魅かれてならないのだ。植物は感覚作用を持たないとするアリストテレス以来の誤謬を、何としても打ち破らなければならない。感覚どころか、りっぱに思考作用も持っていることを、どうしても立証しなくてはならぬ。そのためには、あの地下の根が直接に水に触れたときと、あるいは肥料を含んだ土壌の湿った部分に触れたときとの差異を、あたかも舌で味わいわけるように感じるべきだろう。足許を濡らされるのは嫌だという水への好悪ひとつでも、根のうちのどの部分がどう区別して受けとめるのかを、自分の感覚として知りたいのだ。

人間でも夏の盛りに、清冽な井戸水を口いっぱい撥ね返らせてむさぼり飲むのと、よく冷えた生ビールのジョッキを傾けるのとでは、同じ渇きをいやすといってもその味わいはまるで違う。まして薔薇の根ほどになれば、ただの水と、さまざまな有機物の融けこんだ溶液とでは、すぐ区別するだろうし、その反応も異なっているのが当然であろう。男は、もし出来るものなら、自分の肉体のどこか、たとえば左の手の甲の一部分にでも培養地を造り、そこに本物の、思いきり小さい薔薇を植えこんでみたいと念じていた。爪楊子くらいの、ごく細い緑の茎がどうにか根づき、玩具のジョロで水をかけてやると、薔薇は嬉しがって白根をぞよぞよ動かす。そのむず痒いような感覚をじかに知ることができたら、少しは根の思考法に近づけるかも知れないので、その

ためには左手の親指と人差し指のつけ根のあたりをいくらか抉って、その薔薇に必要なだけの養分や少量の土を埋めこんでやることも、すこしも苦痛だとは思えない。

いや、土壌などという夾雑物をいっさい介在させず、もし人間の軀のどこにでも薔薇が根づいてくれるものなら、頭にでも、肩の上でも、好きなところに住んでもらいたいけれども、高等植物と動物との共生はまず例のないことで、男にとってこれほどの不満はなかった。ナマケモノの背中や、ある種の亀の尾などに、緑藻植物が付着して拡がることはあるが、それは共生というには遠い。木の幹や酸性の花崗岩の上では好んで繁茂する蘚苔類も、動物の皮膚で生育した例は聞かない。唯一の奇跡は綿吹き病の臨床報告だが、ただれた潰瘍とともに共生するほど落ちぶれた関係を結ぶのは堪えがたいことだ。人間もいつから花粉に触れてさえアレルギーを起すような高慢さを身につけたものか、このぶんでは到底しばらくの間は植物と一心同体になるわけにはゆかないだろうが、他のものはともかく、ただ薔薇のために生きたままの肉体を捧げられるならば、それも地下に潜む根のために奉仕できるならば、それだけでいい。

〝車椅子〟の中で、男は熱心に考えた。

むろん、死んだあとならば、そのまま土葬にしてもらって、ほどよく腐って土にまじり始めたころ、その上に巨大な薔薇を一株植えてもらうことはできるだろう。貪婪に伸び続けるその根は、思わぬ獲物の在処(ありど)を知って、暗黒の土の中をかきわけ、多くの支根を張りめぐらしながらしだいに近づいてくる。やがて逃れようもなく四方を取り包むと、ある日ついにそのひとつの尖端が腐肉に触れ、そのまま検屍用の消息子(ソンデ)めいて、どこまでも深くのめりこむ。そのときその薔薇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com